

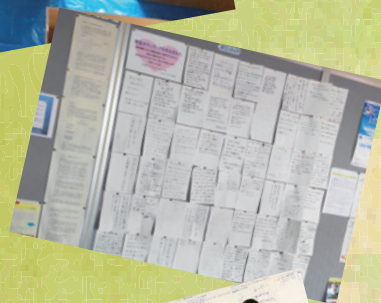
春秋彩

Syunjusai

熊本県立大学広報誌

vol.
45

2016.Autumn



特集

熊本地震①～その時県立大は

後援会便り	2
研究活動紹介	8
地域連携	9
国際交流	10
活躍する卒業生	12
生き生き元気種	13
大学の動き	14
人事情報、未来基金	15
おすすめの一冊	15
熊本県立大学アーカイブス	16

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の干葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。



学長 半藤 英明

あいさつ

生きよ、感じよ

4月より第13代学長に就任しました。来年で70周年を迎える熊本県立大学を、皆様と志を合わせつつ、押しも押されもせぬ存在感のある大学として更なる高みへと導いていきたいと存じます。学生諸君の奮起とともに各位の御支援御協力をお願いする次第です。

本号では、本学としての振り返りの意味を込めて、熊本地震を特集します。私たちの平成28年度は、あろうことか2つの大地震に始まりました。倒壊、破損した家屋、施設は震源地周辺のみならず広域にわたり、筆舌に尽くし難い経験をされた方々も多く、熊本の人々がこの年を、悲劇の大震災を抜きに語ることはないでしょう。我が大学も少なからず被災し、前震では辛うじて保たれていた機能も本震で破壊され、長期にわたる休校を余儀なくされました。恐るべき大震災でしたが、失意のなか、地震の発生直後から学内外で被災者支援の活動をしてくれた学生たちがいたことを誇りに思います。また、数多くの励ましの書状を頂いた他、善意の募金まで賜り、人の情けに熱く感動したことも忘れられません。この場を借りて、お心を寄せて頂いた方々にあらためて感謝を申し上げます。

日本は、言わずと知れた地震国です。近年でも阪神淡路、鳥取、新潟、東日本など、絶望と悲嘆にくれる大震災を経験してきました。そして、その都度、私たちは復興への決意を新たにし、不断的努力でそれを乗り越えようとしてきました。私たちには数々の震災を克服してきた長い歴史があります。私たちは、決して諦めない人生を生きています。

熊本も復興に向け、努力を傾注しています。行政も民間も学校も地域も、復興への道を歩んでいます。しかし残念ながら、これからも、どこかで、震災は起こり得るのです。なれば、私たち日本人は震災から学び、将来への心構えと知恵を蓄えなくてはなりません。ここにあらためて、自分たちは何ができるのかを自らに問いかけ、小さなことで良いから、自分のために、人々のために、心を砕こうではありませんか。

本学は、県民をはじめ、多くの方々から敬愛され、必要とされる大学でありたいと願っています。学生諸君にはこの思いを受け止めてもらいたく、勉学を貴んで自己研鑽に励まれることを期待します。



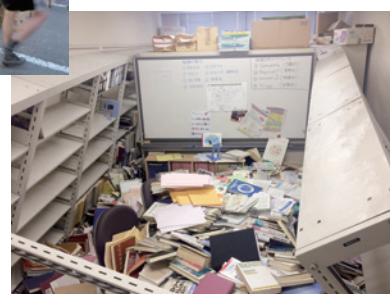
熊本地震発災後の主な動き (5月9日の授業再開まで)

日(曜日)	概 要
4月 14日(木)	● 21:26 前震 (M6.5、最大震度7 (熊本市東区は震度6弱)) ● 22:20 臨時休講 (4/15まで) を本学 HP に掲載 ● 22:30 学内の学生を避難誘導 ● 23:00 任意の避難所としてサブアリーナ、武道場を開放 (避難者 150 人 (うち学生 100 人)) ● 避難者に物資 (毛布、水、ゴザ) を提供。(※物資は本学備蓄分の他、精神保健福祉センター及び消防学校の協力) ● 学生がボランティア活動開始
15日(金)	● 6:00 避難者 370 人 (うち学生 300 人) に炊出しの提供 ● 6:00 施設点検 ● 7:00 第 1 回熊本地震対策幹部会議 ● 8:15 休講延長 (当面 4/19 まで) を本学 HP に掲載 ● 9:30 熊本市から物資 (五目飯 α 米 200 食) を受入れ
16日(土)	● 1:25 本震 (M7.3、最大震度7 (熊本市東区は震度6強))。 ● 学内停電、ガス停止、断水。 ● 3:30 日赤から臨時救護所開設の要請。日赤からの要救護者を武道場へ誘導 ● 5:30 月出フィールド避難者 500 人をアリーナ (一般) 及び武道場 (高齢者、子供連れ等) へ誘導 ● 9:30 停電復旧及び地下水復旧 (上水道は依然断水) ● 給水支援を開始 ● 10:00 学生・教職員向けメッセージを本学 HP に掲載 ● CPD センター、講義棟、学生ロビー (ペット同伴者専用) も開放 ● 避難者 1400 人に (車中泊者等を含めると二千人近くに) ● 学生ボランティア LINE グループ統合 (登録者数約 200 人)、学生ボランティアリーダー会議 ● 県から物資 (簡易トイレ 1000、毛布 100、パン 200、水 100、おにぎり 1000) を受入れ ● 18:00 東稜高校の要請を受け、小峯グラウンドを避難者用の駐車場として開放 ● 22:40 日赤から緊急車両駐車場確保の要請
17日(日)	● 9:00 熊本市から物資 (おにぎり、食パン 300 等) 受入れ ● 11:00 第 2 回熊本地震対策幹部会議 ● 避難者をアリーナ、武道館、学生ロビーに集約 ● 18:00 佐賀県武雄市からの支援物資 (水 462 箱、α 米、クラッカー、かやくご飯) 受入れ。一部を益城町へ提供 ● 学生ボランティアリーダー会議
18日(月)	● 保健師、職員による避難者のケースワーク実施 ● 11:00 第 3 回熊本地震対策幹部会議 ● 12:00 避難所開放規模縮小。日赤臨時救護所、給水支援継続。本学避難所での学生ボランティア解散 ● 13:00 休講延長 (当面 4/22 まで) を本学 HP に掲載 ● 18:30 学長記者会見を実施。本学避難所の経緯等を説明 ● 22:50 日赤から DMAT チーム宿泊要請
19日(火)	● 日赤関係車両約 12 台を受入れ
20日(水)	● 8:30 キャリアセンター、保健センター業務を再開 ● 11:30 精神保健福祉センターから DPAT のトイレ使用要請 ● 学生による熊本市災害ボランティアセンターへの支援活動開始。学生に CPD センターを開放 ● 15:00 第 4 回熊本地震対策幹部会議 ● 17:00 全国災害救護班待機所としてアリーナ 2F を開放
21日(木)	● 12:00 授業再開日 (当面 5/9) を HP に掲載 (関連通知を統合) ● 13:00 上水道復旧 ● 13:30 設計業者による点検 (耐震性の観点から施設の強度を確認) ● 学生の熊本市災害ボランティアセンター運営活動 (~ 5/8)
25日(月)	● 第 5 回熊本地震対策幹部会議
27日(水)	● 熊本市から大学コンソーシアムへ連休期間中の被害家屋調査補助ボランティアの要請。本学学生 (居住環境学科) が対応 ● 最終の避難者が帰宅。大学の支援活動終了
28日(木)	● 第 6 回熊本地震対策幹部会議
5月 2日(月)	● 第 7 回熊本地震対策幹部会議 ● 授業再開日確定 (5/9) を本学 HP に掲載 (関連通知更新)
6日(金)	● 第 8 回熊本地震対策幹部会議 (以降 5/23 まで計 11 回開催)
9日(月)	● 授業再開、図書館再開

震災による被災状況と復旧状況 (9月末現在)

場所	被害状況	復旧状況
学生会館 (食堂)	照明落下・つり天井破損	【立入規制】※学食は学生ロビーで仮営業
サブアリーナ	天井ひび割れ・雨漏り	
環境共生学部北棟	屋上空調施設冷水管装置破損による漏水	6/2 修理済
グローバルセンター、文学部棟	自動ドア開閉不能、壁面に複数の亀裂発生	4/20 自動ドアのみ修理済
キャリアセンター	壁面ガラス破損	4/20 応急措置 (板張り)
小ホール	入口前エントランス照明落下	4/22 照明除却済
環境共生学部西棟	2 F 天井から空調冷水管破裂による漏水、廊下等の浸水、3 F 冷温水管破損による漏水	4/27 2 F 漏水修理済 6/7 3 F 漏水修理済 7/16 浸水床修復済
総合管理学部棟	倒れた書棚等により研究室ドア開閉不能	4/28 対応済
小峯グラウンド	クラブハウス水道管破損による漏水、ロッキングタイル破損、地盤陥没、グラウンド照明灯破損	4/28 水道管のみ修理済
環境共生学部南棟、 総合管理学部棟	壁面に複数の亀裂発生	
文学部棟	渡り廊下継目に亀裂、壁材 2 力所落下、南側入口の庇止めボルト破損	
	4 F 研究室内床から漏水	
環境共生学部西棟、 南棟	通路ジョイント板・壁材の落下	
図書館	3F 閲覧室天井の一部破損	
プール	日除け施設傾倒	
キャンパス	床タイル複数箇所破損	
環境共生学部各棟	教育研究用機器の破損 (44 件)	一部の機器は修理済

※被災箇所・機器の復旧については、公立学校施設災害復旧国庫負担金の交付手続中



「神社の鳥居が目の前で崩れ落ちた」

4月14日(木)午後9時半頃、僕は益城町総合体育館でトレーニング後、自家用車で帰宅中でした。運転中大きな丸太に乗り上げた感覚がして急停車した時、目の前にある神社の鳥居が崩れ落ちるのを目撃しました。何が起きたのか分からないまま自宅に帰ると、親から「家は危険だから入るな」と言われました。



その後間もなく両親の働く益城町役場へ行き、続々とやって来る避難者の名簿作りなどの手伝いをしました。一夜明けると、益城町惣領の祖父の家は住むことが出来なくなっており、周囲では、全壊した家屋の前で押し潰された犠牲者を供養するための花束が添えられていました。僕は、バイト先の学習塾に通う生徒の安否を気遣い、益城町総合体育館を始め、熊本市東部の避難所まで自転車で駆け回っていました。避難所には、芸能人の方々を始め多くの励ましの言葉が寄せられましたが、震災直後は、「頑張れ」という言葉が素直に受け入れられなかったことを覚えています。夏休みになって、徐々に全壊家屋の撤去が始まりましたが、地震の爪痕は今もなお至る所に残っています。僕は、今回生まれて初めて目の前で生死を分ける場面に遭遇しました。災害は、他人事ではなく、本当に誰にでも起こり得るものなのだというのが実感です。

(総合管理学部学生)

「思いつく事は何でもやり関係者と深夜まで意見交換」



総合管理学部4年 道家 敬幸

本震の時は益城町でバイト中でしたが、壁が崩落するなど生きた心地がしませんでした。その後県立大へ避難すると、未明から多くの方々が集まってきたため、他の仲間とともに支援物資の確保やトイレの水の手配など寝食を忘れボランティア活動に尽力しました。

20日以降は熊本市社協のボランティアセンターへ行き、駐車場管理の傍ら、他大学との連携など日夜ミーティングを重ねました。その後講義再開までは、阿蘇久木野の自宅に帰り、近隣の被災家屋での片付けや、震災がれき仮置場での整理を手伝いました。その後県外での就職活動は大変苦慮しましたが、無事県内の企業の内定が決まりました。

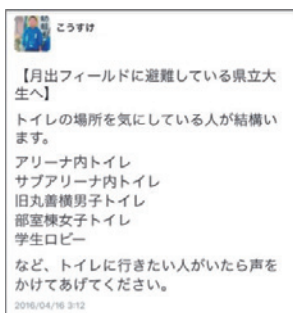


「避難所トイレにかける矜持」



総合管理学部4年 中村 洸介

前震がバイト中のコンビニを襲い、棚の商品が一気に散乱。お客様を安全に誘導後、友人と共にすぐに県立大へ避難しました。本震直後、トイレの混雑ぶりを目の当たりにし、SNSを活用してトイレの案内を呼びかけるとともに、断水となったトイレへのプールからの水の手配やトイレトイレットペーパーの供給、便器清掃に至るまでやろうと決意し、皆と実行しました。電気復旧後はある程度落ち着きましたが、人手が足りず大変苦慮したこともありました。避難者の方々がトイレを利用し続けることができたのが何よりの誇りです。



「段ボール間仕切設置マニュアルを作成」



環境共生学部(居住)4年 小濱 光時

実家は南阿蘇村で、集落は大規模な地滑りで建物が崩落しましたが、自宅は何とか無事でした。前震後は、県立大近くの祖母の家にいましたが、築年数が古く倒壊が怖かったので、本震後は祖母を連れて県立大へ避難しました。その後佐藤哲先生の指導のもと、熊本市の依頼により、拠点避難所でのプライバシー、居住性等を担保した避難所のレイアウトや、段ボール間仕切を円滑に設置するためのマニュアルを作成のうえ、実際に現地で設置するなど避難所運営に力を尽くしました。



「ボランティアサークル部長の思い」



文学部(日文)3年 原口 結衣

地震後自宅のドアが開かなくなったため、一時軽自動車に家族3人が車中泊するという大変な思いをしました。それからしばらくは、不安な思いをしている近所の子どもたちを集めて鬼ごっこをして遊んだり、避難所に飲用水を届けるボランティアをしていました。普段は、老人福祉施設での傾聴ボランティアなどを行うサークル“Maple Leaves”の部長として活動しています。今後も変わらず、江津湖の清掃や託児所でのお祭り等の活動をしていきたいと思っています。

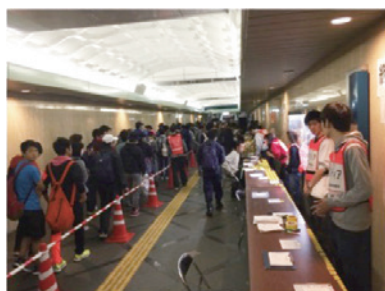


「非常時こそ調整型のリーダー」



総合管理学部 3年 岩崎 貴夏矢

前震で下宿先のマンションが大きく揺れて怖かったので県立大へ避難しました。大学の避難所では、先輩方の応援のもと、徐々に形成されるグループの纏め役を担いました。その後、先生の勧めで熊本市災害ボランティアセンターに活動拠点を移し、各所から集まるボランティアの指令塔として、また本学の代表として活動しました。自分は、皆をひっぱるタイプではありませんが、今回のような非常時こそ調整型のリーダーが求められるのではないかと思います。



「留学生と避難者のケアを円滑に」



文学部（英文）4年 橋本 美優

自宅で卒論制作中に突き上げるような揺れが襲いました。来日して約2週間しか経っていない米国モンタナ州からの留学生を励ましながら、県立大に車で来られる方々の駐車場誘導のボランティアを行いました。日中アスファルト上での誘導は、激しく体力を消耗しました。その後熊本市災害ボランティアセンターでマッチング作業も手伝いました。被災直後の陰湿な雰囲気、避難者にも笑顔で接し、自分には何が必要とされているかを考え、自発的に行動できたことが、私にとって何よりの財産です。



「SNS 駆使は情報コースの強み」



総合管理学部 4年 山下 大樹

バイト先の雑貨店で前震が起き、かなりの割れ物が落下しました。県立大に避難中に本震があり、サブアーナの天井照明の落下が予想されたため、避難者を外に誘導したのがきっかけで、次第に学生ボランティアを統括する立場になりました。徐々に形作られていった学生ボランティア本部では、意思決定を迅速かつ明快地に各所に伝達し、SNS等のツールを駆使できたのが情報コースの学生の強みだったと思います。

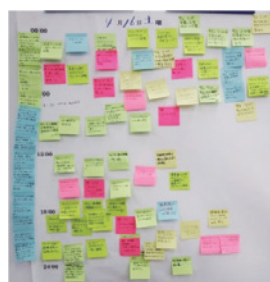


「人命を預かる使命感に奔走」



文学部（英文）4年 竹崎 深太郎

居酒屋でバイト中に被災し、そのまま県立大へ避難しました。学生ロビーの避難者の避難誘導の班長を任せられ、強い余震に備えて、円滑に誘導できるよう、何度も経路の確認をしました。学生ロビーはペット連れの方がペットと一緒に寝泊まりするという特殊な場所となっていました。人命を預かる立場に責任感が芽生え、夜を徹してボランティア活動に頑張りました。その後、熊本市災害ボランティアセンターでもまとめ役として活動しました。



熊本市災害ボランティアセンターでの学生の活動について

総合管理学部 准教授 澤田 道夫

地震発生以来、本学では学生ボランティアの助けを借りて避難者の受入れを行ってきました。その避難所運営が一段落した4月20日ごろ、熊本市の社会福祉協議会から「花畑町に設置する熊本市災害ボランティアセンターの運営を学生に手伝ってもらえないか」という依頼がありました。それを学生達に伝えたところ、3～4年生を中心にたくさんの学生が集まってくれました。翌21日の事前準備を踏まえて、22日から本格的にセンターの運営が開始されました。これは、熊本市にとっても初の大規模な運営でしたが、社協の職員も限られている中、大学生が中心となって運営を行い、ボランティアと被災地をつなぐ役割を果たしました。



このような大学生がセンターの運営の中心を担うという手法は、全国でも初の試みであり、まさに「熊本方式」と呼べる取組と言えるでしょう。



その時教職員は…

副学長 津曲 隆

前震はゼミ生との勉強会の時でした。強い揺れが収まるとすぐに本部棟に向かい、残業中の職員と非常ベルが鳴り響くキャンパス内を対応に走り回りました。相当数の学生が学内に残っており、避難して来た住民と共にサブアリーナに誘導。学生の協力を得ながら、教職員で物資調達及び提供等、夜を徹し支援に当たりました。

本震は自宅でした。大学に急行すると、月出フィールドは避難者で溢れつつありました。午前2時頃の外は寒い。前震の経験を活かし、学生と教職員が自発的に支援を始めました。学生や教職員の顔を比較的知っていた私が、それらの関係者間を仲介し、さらに、学生たちは通信アプリ『LINE』による連絡網を活用しました。その中の学生1人を事務局に常駐させて、大学と学生との間の連絡体制ができると、急速に組織的な活動ができるようになりました。この活動は、一般避難者支援の他、近隣住民への給水支援、お年寄りや障がいのある方への特別支援、炊き出し等へと発展したことから、避難者から主体的に活動した学生たちに対し、数多くの感謝のメッセージが寄せられました。

地震発生の初期段階で教職員は、学生の安否確認を急ぎ、並行して通学困難学生の洗出しとその対応策、また授業開始4日で休校となったために途方に暮れる1年生のケア、授業暦の再検討など、学生支援及び教務関係の膨大な課題について総力を挙げて取り組み、大学再開にこぎつけました。

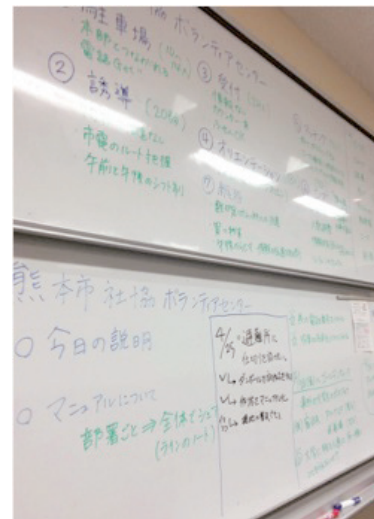
5月9日の朝、学生たちが授業に向かう新緑のキャンパスは眩しく、学生の多くが「大学に来たかった。授業を受けたかった」と口にしていました。学問とは、本来人類に対する脅威に立ち向かうために生まれたものです。学生たちの声は、そのことへの気づきであり、復興へと踏み出していく大きな希望に思えました。



避難所（サブアリーナ）の様子



学生ボランティア会議の様子



学生ボランティア会議の記録

事務局長 仁木 徳子

本学の震災対応は、前震発生時に学内に残っていた学生等の避難誘導から始まりました。翌朝7時、役員・学部長等からなる緊急の幹部職員会議が開かれ、学生等の安否確認、大学施設の被災状況の確認、当面の休講期間と併せ、自主的な一時避難場所として大学施設の開放等が決定されました。

400人近くいた避難者も15日夜には学生50人位までに減少していましたが、16日未明の本震で状況は一変。大学施設等の被害も拡大し、日赤からは大規模災害時の覚書に基づく臨時救護所開設の協力要請がありました。時間とともに避難者は増え続け、大学はメイン・サブの両アリーナに加え、講義棟やグラウンドまでも開放し、可能な限り避難者（車中泊者等を含めると最大で2千人近く）を受け入れました。

しかし、当時対応できた教職員には限りがありました。その時、避難者への支援活動を担ってくれたのが、本学の学生たちでした。避難者や車両で学内が混乱するなか、教職員たちは、学生ボランティアに寄り添い一時避難場所等の運営を支える一方で、施設設備の被災状況の確認や応急対応、関係機関との連絡調整、学生等への情報提供など緊急対応に追われました。

18日の一時避難場所の縮小後も、日赤への後方支援を継続しながら、早々にキャリアセンターや保健センターを再開させ、学生の就職支援や心身不調への相談体制を整えました。また、大学施設の耐震等調査を実施し安全性を確認したうえで、可能な限り被災箇所の点検・補修等を行ない、5月連休明けの授業再開に間に合わせました。

最後に、今回の震災は想定外の事態ではありましたが、教職員・学生がともに力を合わせ、いろんな場面で本学の知見や強みを活かした初期対応ができたものと考えています。



DMAT の緊急車輛



熊本地震全国災害救護班待機所の看板



本学内井戸水による給水の様子

熊本地震に関する調査研究

段ボール間仕切りを製作し避難所における居住空間の確保に貢献

環境共生学部居住環境学科 准教授 佐藤 哲

自分は東北出身なので、東日本大震災における避難所での居住空間の確保の重要性については認識していました。この度の熊本地震でも、本学エリアでの指定避難所である月出小学校では、4月25日から校長先生やPTA会長と協議を重ね、26日には配置レイアウトの模型を製作し、30日にはゼミ生5人と本学学生10数名に協力してもらい、段ボールによる間仕切りを設置しました。

その後、5月始めに熊本市災害対策本部から、集約避難所20数箇所での居住空間の確保について意見を求められ、全体的な間仕切りの作り方マニュアルをゼミ生に作ってもらい、また、水前寺体育館及び熊本市子ども文化会館では、具体的なレイアウトから設置まで手がけました。その際には、窓に近い所には1.5mのクリアランスを設けたり、機械室の近辺には避難スペースを作らないような配置を心がけました。一方熊本市側からは、所定の収容者数を確保できるよう要望がなされ、居住空間の確保との整合性に苦慮しました。特に子ども文化会館では、子供たちの遊び場を極力損なうことなく、市の要望する戸数の確保という難題をクリアすることができました。

現在、益城町にあるテクノ仮設団地の支援プロジェクトに参加して、20戸ごとに集会所「みんなの家」を設置するなど、被災者の孤立化を防ぐための支援策を県を始め、九州の建設系大学の学者や学生などで構成する「KASEIプロジェクト」とともに、日夜議論を深めています。



模型を用いた配置確認



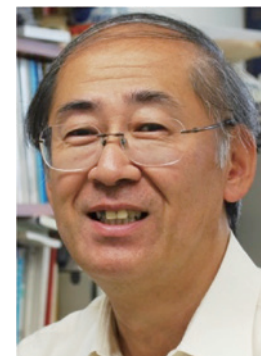
小学校での設置の様子

地震被害調査を行い、来たるべき次の震災に備える

環境共生学部居住環境学科 教授 北原 昭男

甚大な被害を被った益城町中心部に関しては、日本建築学会九州支部の災害調査委員会が中心となって悉皆(しっかい)調査が行われました。実施本部が本学居住環境学科内に設置され、5日間、延べ220名の研究者・技術者が参加して調査が行われました。木質構造学研究室では、構造実験や数値解析に基づくこれまでの研究成果をもとに、地震によって被害を受けた木造住宅の被害状況を調べ、その耐震性能の向上や地域の地震時安全性向上に寄与していきます。

本研究室独自の調査としては、木造住宅の被害軽減を図るため、熊本市内の様々な地区における木造建物の被害調査を行い、屋根・壁などの軽微な被害を含む建物被害の発生要因の分析を進めています。また、市街中心部の新町・古町に存在する伝統的な建物や、熊本郊外に存在する民家建築などについても調査を行い、文化財的に貴重な建物や地域景観を形成する建物の耐震性能を高め、今後に守り伝えていくための方法について検討を進めています。熊本地域の木造建物群が、より安全で、より美しい町並みを形成できるように、これらの調査・研究活動を継続的に進め、今後の復旧・復興に少しでも役立てていきたいと考えています。



古民家の構造調査



被害調査実施本部の様子

復興へ。もやいすとジュニア 500 人で挑む熊本地震（全学教育推進センター /COC 推進室）

1 年次選択必修科目「もやいすと（地域／防災）ジュニア育成」は、平成 28 年熊本地震を受け、当初計画していたプログラムを一から見直すことにしました。「もやいすと 2016（熊本県立大学復興支援チーム）」として、1 年生約 500 名が 100 チームを作り、被災地での災害支援フィールドワーク等をはじめとした復興支援活動に取り組む授業プログラムへと変更しました。地域ジュニアは「コミュニティ支援」、防災ジュニアは「災害ボランティア」の視点で活動し、学習したことを発表会（12 月 24 日開催予定）までにまとめていきます。

前学期中にチーム作りを終え、夏季休業中は熊本県の「平成 28 年熊本地震からの復旧・復興プラン復興計画」や書籍等で基礎知識修得に取り組みました。そればかりではなく、自主的に行動を始めたチームもありました。もやいすと 2016 の 100 チームには、ボランティア活動や震災学習会等の情報が適宜提供されます。そうした情報をもとに、ボランティア活動に参加するチームが出てくる等、主体的な行動が生まれています。

後学期は、被災地の仮設住宅を対象にフィールドワークを複数回予定しています。それぞれに参加したチームメンバーが情報を持ち寄るジグソー学習の手法で学びを深め、復興に向けた課題解決に取り組みます。このプログラムでは、2 年次選択科目「もやいすとシニア育成」の受講生並びに 3～4 年生からなる SA（スチューデント・アシスタント）が参加し、上級生の立場からジュニアへの学修支援を行っています。このためシニアは、ジュニアに先駆けて 9 月 10 日に避難所になっている益城町総合体育館や益城町の仮設住宅を訪問し、自らの学びを深めると同時にジュニア支援の準備を行いました。また、シニア学生はこの他、問題解決のためのツール開発スキルの向上を目指し、ジュニア学生が演習で使う「フューチャーセッション」や「クロスロードゲーム」の開発にも取り組んでいます。

もやいすと育成プログラムは、ジュニア・シニア・SA・教員そして地域の皆様と多くの関係者が関わる双方向学習環境として構築しています。今年度は、熊本地震という未曾有の体験からの学びを通し、地域づくりのキーパーソン「もやいすと」を育成します。



後援会便り

後援会とは

- 本学学生の保護者又はこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果を上げることを目的としています。



PUK リンピックの競技（玉入れ）の様子

後援会では、学生活動支援事業として、各サークルの活動、白亜祭（学園祭）の開催、九州地区大学体育大会（インカレ）出場等に必要な費用に一部助成を行っています。今年で通算 8 回目となる自治会スポーツ大会（通称「PUK リンピック：写真」）は、学部学科・学年・サークルの垣根を越えた大学全体での交流を目的としており、その活動にも支援を行っています。

また今年度は、学生のボランティア活動を支援するため、ボランティアに関する保険料の助成を行っています。

後援会の事業

次の 4 つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

＜就職対策事業＞

- 就職対策講座（公務員試験対策講座、就職活動実践講座、IT パスポート試験対策講座、二級建築士受験対策講座、簿記検定試験対策講座等）の受講料の助成又は開催経費の助成
- PROG テスト（社会人基礎力の測定）の実施支援、TOEIC®IP テスト開催の支援及び受検料の助成、各学部による就職支援事業開催経費の助成、資格取得者への助成 等

＜教育研究推進事業＞

- 共同自主研究への助成
- インターゼミナール大会等への参加助成 等

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしています。

まだ未加入の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業を御理解いただき、是非加入ください。途中年次であっても随時入会を受け付けています。

＜国際交流推進事業＞

- 海外留学・研修期間に応じて渡航経費等の助成
- 留学対策講座の受講料の助成
- 協定校研修団への授業・日本文化紹介等経費の助成 等

＜学生活動支援事業＞

- 各サークルの活動費・白亜祭開催経費・全国大会出場経費等の助成
- 学生用コピー機の設置、コピーカード販売
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置
- 防犯対策用ブザーの無料貸出し 等

研究活動紹介

環境共生学部居住環境学科

准教授 **柴田 祐**

プロフィール：

大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。
大阪大学大学院工学研究科助教を経て、2013 年より現職。



熊本地震からの復興の姿を考える

私は農村計画といわれる分野を専門としており、人口減少や高齢化に伴って存続が危ぶまれるような集落や、棚田などの美しい農村景観の維持継承のあり方などを研究しています。また、学生と様々な地域へ出かけ、住民の方と一緒に地域の魅力を発掘、発信するような実践的な取り組み、例えばフットパスコースづくりなども行っています。

4 月に発生した熊本地震では、非常に広い範囲で、大きな被害が発生しましたが、地域づくりに関わる専門家として何を考え、どのような取組を行っているのか、紹介させていただきます。

まずは被害状況を把握する

熊本地震による被害は、家屋の被害だけでなく宅地の崩壊や農地や水路の損壊があり、さらに 6 月の大雨では河川堤防が決壊し浸水被害もありましたし、がけ崩れが大小無数に発生しました。復興を考える際には、このような多様な被害に応じて、それぞれの地域にふさわしい復興の姿を検討していく必要がありますが、そのためには、どのような被害が、どのような場所で発生しているのかを把握することがその第一歩です。私の研究室では、地震発生直後から、4 年生、大学院生総出で、建物の被害状況調査を行いました。6 町村から特に被害の大きかった 14 集落を選び、その集落内の全ての敷地 1,884 件の建物の被害状況を把握しました。建物の被害状況は母

屋だけでなく納屋なども含みますし、擁壁の崩壊の有無も合わせて調査を行いました。ここまで詳細で広範囲の調査は他では行っていないと自負しています。学生達も積極的に調査に参加してくれましたし、被災者の方から直接お話を伺う機会も多く、大きな経験となったと思います。

復興に向けて

この調査結果を復興にどう活かすのか。被災地は、人間に例えれば怪我人で、人間と同じように、回復の程度に応じながら、段階を追って、治療を行っていく必要があります。そのために、復興の各段階で調査に基づいた＜復興地区カルテ＞を作成し、地区診断をしながら、地区の目指すべき方向を常に再確認し、復興の取組を進めていく必要があります。今後、半年後、1 年後、2 年後、段階を追って被災地を診断していきながら、その地域にふさわしい復興の姿について、住民の方々と一緒に検討していきたいと考えています。



地・域・連・携

【地域連携型卒業研究（学生 GP）】

玉名市における着地型観光開発を活用した地域活性化

総合管理学部津曲研究室は、昨年度、玉名市ふるさとセールス課及び北稜高校ビジネスマネジメント学科と連携し、卒業研究「玉名市における着地型観光の開発と商品化に関する研究」に取り組みました。この中で、地域資源発掘のため、地元若者の地域理解を促しながら地域情報を効果的に収集していく“地元高校生との連携手法”開発とその検証を行い、また、観光客の玉名市内周遊を促すことを意図し、玉名市着地型観光「第3回旬たま WEEK」に謎解きゲームを組み込んだ“新しい観光スタイル”を開発し、誘客につなげました。津曲研究室と玉名市は、本年度も学生 GP で連携し、着地型観光開発を活用した地域活性化に関する各種の取組を展開しています。



熊本県（市）における「生活者としての外国人」のための日本語テキスト作成

現在、日本に住む外国人や外国にルーツを持つ人々の増加に伴い、日本語教育の需要が高まっています。文学部日本語日本文学科馬場研究室では、熊本市国際交流振興事業団（以下、事業団）と連携し、平成 23 年度から日本に暮らす外国人を対象にした日本語教材の開発を行って来ました。彼らの日本での生活をサポートすることを目的に、熊本県（市）在住の外国人が生活の中で困難に感じる場面を取り上げてテキストを作成しています。

平成 27 年度は、平成 23 年に実施したニーズ調査を改めて行い、その結果をもとに、新たに『地域ルール編』、『出産・子育て編』、『学校編（保護者向け）』、『行政手続編』、『ムスリムの生活編』の 5 つのテーマで開発を行いました。本研究で開発したテキストは、事業団ホームページから閲覧出来ます。

また、平成 28 年熊本地震の発災にあたり、本研究で培った連携のもと事業団が発信する災害支援情報を「やさしい日本語」に翻訳する協力活動を実施しました。

今年度は「災害時における日本語テキスト作成」等 4 つのテーマで、熊本地震における被災者の実態把握、今後の課題発見を目的に活動しています。



学生 GP イベント「親子ペットボトルピザ作り教室」を開催

本学では、学生が地域と連携して研究教育を行う学生 GP 事業を推進しています。その一環として、今年 3 月 28 日に八代市東陽町にある東陽定住センターで、ペットボトルピザ・イベントを開催しました。

八代市の中山間地域の活性化を図るため、地元の特産品などを六次産業化するプロジェクトの中で取り組まれたこのイベントは、ピザを情報媒体と捉え、ピザを中心に様々な特産品を掘り起こしていこうという取組で、当日は、20 名を超える参加者が集まりました。ペットボトルにピザの材料を入れてしっかりと振り、発酵した生地をペットボトルから取り出して延ばして焼くだけという、手軽なペットボトルピザを子供から大人までが楽しみました。また、地元在住のくまもと食の名人による生姜キンピラづくりの実演なども行われました。

イベントの最後に試食会を行いました。生姜キンピラのピザを食べた参加者から、「美味しい」との言葉が相次ぎ、新しい食の発見ができました。



【地(知)の拠点整備事業(地域志向教育研究)】

「阿蘇大麦」を活用した地域活性化への挑戦！
「震災復興・地域活性化を目指す【県産麦パートナー強化推進事業】への学生参画による実践型教育研究事業」に取り組んでいます。

「あか牛」「高菜」等続く阿蘇地方の特産品作りを目指す「県産麦パートナー強化推進事業」に、今年度、本学環境共生学部食健康科学科・北野研究室と総合管理学部・丸山研究室がタッグを組んで参加し、商品開発&普及促進&マーケティングに挑戦しています。そのキックオフイベントとして、7月に、熊本県の「食の親善大使」である出張料理人・小暮剛氏とのコラボで、阿蘇の大麦



を使ったカレーの試作作りを、本学で実施しました。阿蘇の豊富な食材を活用した美味しいカレーができ、これからスタートする事業のいい弾みになりました。本事業を通じて、実践型教育による学生の“学士力”を醸成すると共に、地域の活性化、そして震災からの復興への貢献を果たしていきたいと思ひます。なお、このイベントの様子はBSジャパン「運命の日(7/24)」で放映されました。

この取組が、阿蘇地域の震災復興、地域活性化の支援につながっていくことを願ひ、教員・学生が一緒になって、更なる創意工夫を進めていきます。

アプリを通して、県民総幸福量の最大化を応援します

県民総幸福量の最大化を進める熊本県のしあわせ部では、幸せづくりのための様々な企画・アイデアを生み出し、幸せづくりの実施を進めています。

この熊本県しあわせ部と本学飯村研究室の学生が連携し、地域志向教育研究事業の一環として「くまび〜熊本県しあわせ部公式アプリ〜」を開発しました。



日常の中の小さなしあわせ「プチはっぴー」をつぶやきユーザー間でシェアすることができる本アプリは、今年4月の公開以降多くの方が利用されています。利用者アンケートでは、「色々な人の幸せをおすそ分けしてもらえる」「震災を経験して、落ち込んでいる時に気持ちを明るくさせてくれた」等の感想が寄せられました。

8月26日には、熊本市のくまモンスクエアで、しあわせ部長のくまモンも出席して、本アプリ並びに同研究制作映像「しあわせだ県、くまもと」の贈呈式が執り行われました。



人吉球磨地域の活性化に向けて～KUMAJECT～

KUMAJECTは、人吉球磨地域の活性化を目的とした学生主体のリサーチプロジェクトで、2007年から実施しています。現在は、大きく2つのプロジェクトを展開しています。

1つは、地域コミュニティの活性化プロジェクトで、①あさぎり町・松尾集落の再生(限界集落の再生)、②錦町・蕎麦作りによる住民総出の地域再生(遊休農地の活用)、③球磨村・田舎の交流館さんがうらの利活用(小



学校跡地の再利用)、④相良村・知名度向上等による地域創生、⑤人吉市・ウンスンカルタによる鍛冶屋町通りのまちおこしをテーマとしたプロジェクトです。

もう1つは、人吉球磨地方の地域全体としての持続可能な地域づくりのため、滞在型の体験ツアーを企画・運営するプロジェクトである「KUMAJECT ツアー」です。本年は地震の影響を受け、スタートが遅れましたが、7月にKUMAJECT2016の活動をスタートさせ、熊本の復旧・復興にもつながるような、人吉球磨地域の活性化に取り組んでいます。





国際交流

-International Exchange-



本学初！「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」で世界に飛び立つ県大生

「平成 28 年度第 5 期官民協働留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～」に、本学で初めて宮崎恵理さん（文学部 3 年）と萩尾風紗さん（文学部 4 年）が採用されました。

この制度は、文部科学省が日本学生支援機構および約 180 社もの民間企業と協働し、海外における学生の「実践活動」や「異文化体験」を焦点に、学生自身が立てた計画に基づいた留学を支援する留学プログラムです。

宮崎さんは 10 月からインドネシアに 1 年間留学し、日本語教育や異文化理解のための活動を行う予定です。また、萩尾さんは 9 月からマレーシアをはじめとするアジア諸国に 5 カ月間滞在し、熊本の果物などの販路拡大について調査を行います。

このことは、二人の自己実現のための糧となるだけでなく、海外へのチャレンジを志す本学の学生たちにとっても大きな励みとなります。今後も多くの学生が、二人に続いて飛び立っていくことが期待されます。



海外にも広がる復興支援の輪～韓国・祥明大學校より～

平成 28 年熊本地震の発生を受け、本学の姉妹校である韓国・祥明大學校より本学へ多額の災害義援金をいただきました。この義援金は、本学と特にゆかりのある日本語文学科の学生有志の皆さんが中心となって集められたもので、今後、被災した大学設備の復旧などに充てられる予定です。

海の向こうからも本学を応援してくれているたくさんの仲間がいる—このことは復興を目指す本学にとって力強い支えとなります。祥明大學校の皆さん、本当にありがとうございました。



ワールドキャンパス訪問団が来学

平成28年6月16日、20日の2日間、ヨーロッパの大学生を中心に14名で構成されるワールドキャンパス訪問団が来学しました。本学からは各学部より30名あまりの学生が集まり、ペットボトルを利用したユニークなピザ作り体験や食事会、防災に関するゲームなどを通して交流を行いました。最初は英語でのコミュニケーションに戸惑う学生の姿もありましたが、様々な作業やゲームを一緒に行うことで次第に打ち解け、和気あいあいとした雰囲気の中で国際交流を楽しむことができました。



活躍する卒業生



愛媛大学沿岸環境科学研究センター

のみやま けい
准教授 **野見山 桂** さん

平成 15 年 3 月 環境共生学部生態・環境資源学専攻(現環境資源学科) 卒業

平成 20 年 3 月 大学院環境共生学研究科博士後期課程修了

趣味でも研究でも本気で取り組み、とことんやってみよう。何かを成し遂げ、高い評価を受けた時の快感を多くの学生に味わって欲しい

愛媛大学では、早くから海洋汚染等の様々な環境汚染問題に取り組んできました。その中で沿岸環境科学研究センター（CMES）は、化学汚染や沿岸環境を対象とした環境科学研究のレベルアップを図りながら、アジアでの環境研究を先導し、学術的・社会的貢献を果たす中核研究拠点として、平成 11 年に設立されました。CMES の研究活動の重要な基盤の一つが、生物環境試料バンク（es-BANK）です。es-BANK は、愛媛大学が過去 50 年近くにわたり世界各地から収集し冷凍保存している野生生物や海水、土壌などの試料を系統的に整理し、学内外の研究に提供しています。es-BANK の試料は、種類数、採取年代、採取地域の広さなどにおいて他に類のないコレクションであり、愛媛大学のみならず世界の「宝」ともいえるものです。私達の研究室では、これらの試料を積極的に活用し、生物蓄積性の環境化学物質について、環境・生態系汚染の実態解明、広域分布の特徴と環境動態解析、汚染の過去復元と将来予測、リスク評価などの研究をグローバルな視点で展開し、数々の成果を挙げ、世界をリードしてきました。

このような仕事に携わることができるおかげで、私は世界中の生き物や自然環境へ目を向ける機会が増えました。その中で、高校生の時からの趣味であった「写真」を通じて、野生生物や自然環境を撮影し、後世へ記録として残したいと思うようになりました。この度、世界最大規模の写真コンテスト「Sony World Photography Awards」において、一般公募部門の最優秀賞である『フォトグラファー・オブ・ザ・イヤー 2016』に、日本人として初めて選出されました。今年は、世界 180 以上の国・地域から過去最高の約 23 万点の応募があったそうです。受賞作品「Enchanted Bamboo Forest」は、わずかな月明かりの下、竹林の間

を飛ぶ無数のヒメボタルを写したものです。ヒメボタルは、森林に生息するホタルの仲間で、水辺で見られるゲンジボタルや撮影場所を見つけるまで 4 年の月日を費やしました。現在、ヒメボタルの棲息地は減少傾向にあり、このような美しい風景を少しでも後世へ残していけるよう、啓発活動にも力を入れています。

私は、指導する学生に「趣味でも研究でも、やるからには本気で取り組みなさい」と言います。中途半端が一番よろしくない。やるならとことんやってみよう。研究でも趣味でも、何かを成し遂げ、高い評価を受けた時の快感を多くの学生に味わって欲しいと思います。

*私の写真は以下のサイトでご覧いただけます。

<http://keinomiayama.smugmug.com/>





生き生き元気種！

このコーナーでは、
地域で活躍する熊本県立大生のお届けします。

環境共生学部食健康科学科座談会



左上から、環境共生学部食健康科学科4年留野 菜月、同堤 麻耶、同河原 あい、同射場 麻梨亜、左下から、同科助手中嶋 名菜、同山元 涼子、環境共生学研究科博士前期課程2年小泉 采音

まさか熊本で地震とは・・・

- 小泉 私は出身が関東なので、5年前に東日本大震災を経験しました。でも、まさか熊本に地震が来るとは思ってませんでした。本震の時もベッドの上で揺れながら母親と電話していました。
- 堤 前震の時から友達とメインアリーナの研究室にいました。ネットで大地震の後には大きな余震があることを知り、友達と身を隠す場所や持って逃げる物を事前に確認してました。そしたら予想どおり大きい地震が来て、「キター!!」って(笑)
- 一同 (笑)



大学で炊出し

- 中嶋 非常時用の飲用水を運搬しているときに、実習に使用している米など大学内の米の在庫が50kgあることが分かり、大学本部と相談して食健康科学科(以下「食」という。)で温かい食べ物を避難している人に提供しよう、ということになりました。
- 留野 備蓄の毛布を避難者に配り終えた位から、私がLINEで仲間呼びかけ、みんなで深夜1時過ぎからお米を洗いました。
- 射場 炊出しの呼びかけがあったとき、「運搬などの作業は他の人でも出来るけど、大量調理室での炊出しは、食の4年生である自分達しか出来ないことだ」と思い参加しました。
- 堤 先生にサポートしてもらいながら、夜のうちに数名の学生でスチームコンベクションオープンと炊飯器でご飯が炊けるよう準備を行いました。その他の学生は、朝6時に集合してもらうよう連絡をし、朝からみんなで炊出しを行いました。
- 射場 ご飯を保温用のコンテナに入れて現場まで運び、お碗にラップを置く人、塩をまぶす人、結ぶ人など流れ作業で分担して。避難者の人たちに手伝って貰いながら作りました。
- 中嶋 その時は10kg、150人分位でしょうか。



学生ボランティアの「食と健康」に関する後方支援

- 山元 本震後は電気が使えず、暫く様子を見ていたのですが、お昼に電気が回復してから事務局と相談して、実習用の炊飯器を利用してお米を炊きました。その頃に、南先生が応援に来て

くださったので学生がとても元気になりました。本学科は少人数生の学科なため、学生と教員の信頼関係が築けていると実感した瞬間でした。それから4回程、小泉さんたち院生が主体となってボランティア学生用の食事を提供していました。また、地域の管理栄養士の方も学生支援の応援に来てくださいました。学生ボランティア用の炊出しは18日の午前を最後に、その後は各自で食事の調達はしてもらっていました。

- 河原 私たちは、炊出し後県外出身の学生が徐々に実家に帰ってしまい、ボランティアする人が段々減ってきたため、避難所での学生ボランティアの活動をやっていました。その中でも、私達には、固い食物が咀嚼できない人のおかゆの要望や、食物アレルギーに関する問合せなど、食に関する相談が多数寄せられました。



自然に「食と健康に関しては食に聞け」という空気に

- 射場 学生ボランティアの学生達の間では、自然に「食と健康に関しては食に聞け」という空気が出来上がってましたね。「食の子ならきっと解決してくれるだろう」と(笑)
- 河原 「団子は若い人、パンはお年寄」とか。「ピーナッツが入っている場合説明書きを添える」とか。
- 山元 学生はどうしても「やってあげたい」という気持ちがはやっていて、教員としては、それを抑え気味に指導していました。特に支援物資の調理など食品衛生上の問題についてですね。



衛生管理面で学んだことをボランティアで実践

- 留野 避難所縮小の件について、ネットで色々な書込みがあり、頑張っていただけに大変悔しい、と宮崎にいる母親にこぼしたんですが、母親から「短期間でも自分の出来ることを悔いのないよう精一杯やったのであれば、それを誇りに思っているんだよ。」と言われ肩の荷がおりた感じがしました。
- 河原 非常時だからこそしっかり食べないといけないと思います。ボランティアは大事ですが、自分が元気で初めて他者を救えると思うんです。体が資本だからこそ、それを支える「食」って大事なんだと、みんなに伝えたいですね。
- 中嶋 学生の奉仕精神が旺盛ですごいな、と感心しました。また学生ボランティアの中に食の学生がいて、衛生管理面で学んだことをしっかり実践していたので、安心して任せることができました。
- 山元 大学の調理室が1階にあったこと、スチームコンベクションオープンや電磁調理器など、ガス、電気両方に対応できる設備を整えていたこと、また、学生が管理栄養士になるために一生懸命学んでくれていたおかげで今回の地震では炊出しがスムーズにできたと思います。



大学の動き

平成28年度オープンキャンパスを開催

7月17日(日)と24日(日)にオープンキャンパスを開催し、2日間で約1,500名の方にお越しいただきました。当日は、教員によるサマーカレッジ(模擬授業)の開講のほか、学部・学科紹介、入試説明、施設・研究室見学や、学生によるキャンパスライフ紹介、ゼミ&プロジェクト体験ツアーなど、多彩なプログラムを実施しました。

終了後のアンケートでは、「サマーカレッジでの講義体験や在学生の説明などを通して、学部・学科の内容や大学の雰囲気を知ることが出来てよかった。」という声を多くいただきました。



名誉教授の称号授与

《平成28年7月26日授与》



石橋 敏郎 氏
(元総合管理学部教授、
専門分野：社会保障法)
税所 幹幸 氏
(元総合管理学部教授、
専門分野：教育工学)
明石 照久 氏
(元総合管理学部教授、
専門分野：組織論)

《平成28年8月3日授与》



古賀 実 氏
(前学長・環境共生学部教授、
専門分野：分析化学)
三木 悦三 氏
(元文学部教授、
専門分野：英語学)
福島 英生 氏
(元環境共生学部教授、
専門分野：臨床医学(内科学))

人事情報

熊本県立大学未来基金への御協力に心より御礼申し上げます。

未来基金寄附者御芳名 (H28.1.1 ~ 6.30)

個人5件、古本募金15件 (敬称略、50音順)

50万円 渡辺満利子

お名前のみ 井上勇人、王麗艶、高野優

古本募金 古賀実、税所幹幸、藤田久美子、藤本さおり、
森本真由美、総合管理学部有志一同(9件)

※お名前の掲載を希望されなかった方 個人1件、古本募金1件

基金創設(平成21年9月)以来の寄附金総額は、
99,840,490円となりました。

未来基金平成27年度活用実績

◆熊本県立大学奨学金の充実 7,320,000円

修学支援	西部電気工業奨学金	4,200,000円
	同窓会紫苑会奨学金	2,000,000円
海外留学 支援	短期派遣留学生支援奨学金	770,000円
	小辻梅子奨学金	350,000円

◆「熊本で世界と向き合う」をコンセプトした
国際化事業 1,040,250円

※熊本県立大学国際関係シンポジウム2015「日米中間関係の
新展開」の開催経費の一部(講師、パネリスト招聘経費)

熊本地震に伴う義援金の御報告

今回の熊本地震に対する本学の被災に当たり、次の方々から義援金をいただきました。

この場をお借りいたしまして、御寄附者の御芳名の報告と、
温かい御支援に感謝を申し上げます。

なお、この義援金は、主に本学施設の復旧や、被災した学生への支援等に大切に活用させていただきます。

御寄附者御芳名(敬称略)

- ・医歯薬出版株式会社
- ・鹿児島県立短期大学
- ・アメリカ学会
- ・一般社団法人 全国栄養士養成施設協会
- ・新日本有限責任監査法人福岡事務所
- ・株式会社CRS
- ・韓国 祥明大学校
- ・加藤千恵(立教大学現代心理学部教授)
- ・公益財団法人大学基準協会
- ・公立大学法人福知山公立大学

引き続き皆様からの御支援、御協力をお願い申し上げます。



王丹 著
加藤敬事 訳
『中華人民共和国史十五講』
(ちくま学芸文庫)。
筑摩書房、2014 年。
ISBN978-4-480-09596-1



おすすめの一冊

1989 年 6 月 4 日未明、中央政府の民主化を求めて天安門広場を埋め尽くしていた多く学生の群れに、人民解放軍の装甲車が突っ込んだ。「死者 319 人」(中国共産党公式発表)、多数の負傷者を出した第二次天安門事件、所謂「六四」だ。当時内陸部の大学にいた我々留学生には、徹底した報道管制のため北京の状況は窺い知れず、短波ラジオだけが頼りだったのを覚えている。この時の中国人学生運動の中心にいたのが本書の著者王丹だ。本書は、建国以後「六四」へと向かう中国と、「六四」以後、中国はどこへ向かうべきだったのかの観点から中国現代史を整理している。台湾の大学での講義が基になっているそうだが、一つの解釈としてはとても読みやすい「中国現代史」だ。中国全土を巻き込んだ混乱から漸く香港へ逃げ出して帰国した当時の自分自身の状況を思い出しながら、よく分からなかった「六四」を覆っていた霧が少し晴れた様な気がした。



文学部 教授 山田 俊

熊本県立大学アーカイブズ



考訂今昔物語

肥後隈本藩士、井澤長秀(蟠龍)の考訂・纂註になる『今昔物語』。前編十五卷は享保五年(1720)、後編十五卷は同十八年に、京都の書肆、柳枝軒茨城多左衛門(後編は江戸の小川彦九郎との相版^{あいはん}＝共同出版)により刊行された絵入り本。『今昔物語集』は平安後期に編纂された説話集だが、必ずしも広く流布したものではなく、本書の刊行により広まったといっ

てよい。当初は、天竺部・震旦部をも刊行の予定であったようだが、外題にあるように、「和朝(本朝)」の部のみで終わった。本文中には諸書を博搜しての註記が、長秀の手により加えられており、彼の考証癖がよくうかがわれる。

解説：文学部 教授 鈴木 元

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報紙編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502 (住所記載不要)
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学
〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
TEL 096(383)2929 (代)
<http://www.pu-kumamoto.ac.jp>